

ネパールにおけるフィールドワーク

—ネパール大地震から3年—

槇 殿 伴 子

はじめに

2018年夏、ネパールにおいて3年振りとなるフィールドワークを敢行した。この現地調査は今年度から身延山大学国際日蓮学研究所を研究機関として、向こう三年間に渡る科学研究費助成事業基盤研究C（課題番号18K00066）の一環としてである。主な目的はチベット仏教についての文献調査であったが、他に、2015年に発生したネパール大地震の後の様子を確かめたかった思いも強かった。7月30日に関西国際空港から中国南方航空の便で出立し、広州経由で同日の夜、ネパールのトリブヴァン国際空港に降り立った。飛行場の脇に2体の仏像が出迎えるように立ち並んでるのが目をひいた。ターミナルの入り口付近の壁に「Welcome」など、歓迎を意味する言葉が英語をはじめとして各国語で表記されていたが、その中に「ようこそ」の日本語表記がないのを少し寂しく思った。空港でのビザ申請の際、係官が、筆者のパスポートのページをめくりながら直近での訪問が2015年4月であることを確かめたとき、大地震の3年後に戻って来たことを告げると、係官は顔を上げて筆者を見、「たすかったんだね（Oh, you saved your life!）」とやや驚きの表情でにっこりして言った。あの大地震から3年が経っていた。本稿は今年度の科研費によるネパールにおけるフィールドワークの報告であるが、3年前に遡って、報告を始めたい。今回の報告は恩師である身延山大学教授の望月海慧先生から「滞在記」を書いてはどうかと勧められ

たことがきっかけである。実は3年前にも、帰国後すぐに望月先生から地震の状況を書いてはどうかと勧められたが、当時は簡略な出張報告を提出する以外には成し得なかった。そのときの反省も含めて、当時の震災の状況から書き起こすこととする。

2015年のネパール大地震

2015年4月25日、筆者は身延山大学東洋文化研究所を研究機関とし、科研費（平成14年度～平成16年度基盤研究C課題番号26370057）を施行して、今回と同様に、ネパールに入り、フィールドワークを行っていた際、同地で地震に遭遇した。それ以来、なかなかネパールに戻る気がしなかったというのが正直なところであった。命からがら逃げ出すのが精一杯という状況の中で、もう一度行くには足がすくむ思いであったのだ。

地震の3日後、尚、揺れが続く中、ごったがえす空港を後にして、広州経由の便で帰国の途につくこととなった。地震の影響で帰国便が遅れ、広州で一泊することとなった。広州の飛行場で、エベレスト登山中に同じく被災したという兵庫県芦屋市からの日本人登山客の一行に会い、「山上からひとが落ちてくるのを見た」という話も聞いた。翌日、関西国際空港への午前中の便で隣の座席に座った男性がわたしの子供がぐうぐう寝ているのを目にして「よく寝ていきますね」と声をかけてきた。子供が、昼寝ではなく、昼前から寝ているのがおかしかったのだろう。ネパールで地震に遭遇したと話すと、男性は「神戸で被災した」と言った。1995年1月17日に起こった阪神淡路大震災である。地震が自分だけの特別なものという気持ちが途端に消えていった。

ところで、2011年3月11日に起こった東北大震災の日には、筆者はインドのサルナートで、聖下カルマパ17世ウルギャン・ティンレイ・ドルジェ（1985～）と彼の師ケンチェン・チャング・リンポチェ（1933～）のセミナーに参加していた。当日、会場の食堂で、参加者の口から震災の知らせを聞き知った。

ネパールにおけるフィールドワーク（槇殿）

地震と福島原発事故の知らせを聞いた聖下カルマパは福島のために慰霊のセレモニーを執り行った。この原稿を書いている際中にも台風21号の上陸によって関西国際空港が浸水するという災害が起こった。わずか2週間前に利用したばかりなのにと考えると、北海道が地震に見舞われた。暑真町の土砂災害の様子をテレビのニュースで見たとき、ネパール大地震もまさにこのようだったと、また記憶が蘇って来た。

3年前のネパール地震当日、わたしはカトマンズから西に40キロほど離れたナモーブッダという仏教の聖地にいた。仏教の開祖ゴータマ・ブッダの前世譚の一つに数えられる場所である。出産後に飢えて疲労した雌虎が自分の産んだ5匹の子供を食べようとしていたとき、釈尊が崖から飛び降り、身を投げて飢えた虎に身体を与えたという伝説に基づき信仰を集めている巡礼地である（写真1 a、1 b）。2008年にその地に建造されたカギユ派の大寺院が、チャング・リンポチェを座主とするチャング・タシ・ヤンツェ寺院である（写真2）。筆者はその寺院附設の仏教大学で教鞭をとるケンポ（大学の教授に相当）・カルマ・ゲンドゥンに2009年以来師事しており、3年前も、ケンポの下で勉強するため、同地に滞在していた。

4月25日の正午前、寺院の階上の食堂で昼食を摂るため、僧侶たちが続々と



写真1 a ナモーブッダの碑



写真1 b ナモーブッダに捧げられた
バター・ランプ

集まってきていた。私も席に着いたところだった。と、突然、ぐらっと激しく建物が揺れ始めた。周りの僧侶から「ジョ、ジョ（行け、行け）」という声が上がリ、皆、一斉に食堂を飛び出し、階下へ駆け下りた。私も慌てて階段を駆け下りて外へ出た。



写真2 チャング・タシ・ヤンツェ寺院

口々に「サヨ（地震）！」と言

う声が聞こえてくる。一時間ほど外で震えていると、また、急に大地がぐらぐらと揺れ始めた。

そこで三日間過ごした。周囲の家畜小屋の土塀は崩れ落ちていたが、山の頂上に建造され、絶壁に張り付くように建てられていた寺院は、まったくびくともしなかった。堅固に威風堂々と立ちそびえる寺院の建築技術の高さに目を見張った。周りの景色も一見、平穏に見えた。土砂崩れの様子もなさそうであった。ただ、揺れだけが持続的に起こった。皆、屋外で寝た。僧侶たちは寺院の庭に杭を打ち立て、テントを張り、そこで寝泊まりを始めた。私も含めて外国人訪問客たちは寺院の敷地にあるゲストハウスの軒下を雨宿り代わりにして石の床にマットを敷いて寝た。夜間に何度も揺れた。そのたびに、わたしが「キャー」と叫ぶので、翌朝、「あなたの声の方がもっと怖い」と若い僧侶たちに笑われた。チャング・リンポチェも高位の僧侶たちに護衛されながら、屋外の庭に張られたテントで過ごされていた。

私も含めて外国人訪問客の心配事は帰りの飛行機の便であった。空港が閉鎖され、飛行機がキャンセルされたという情報が入ってくる。「空港に行っても無駄よ」と同じゲストハウスの女性客に言われた。カトマンズにある空港会社の事務所に直接電話して確かめると、私の利用する中国機は通常通り運行してい

るという。だが、問題は どうやって、空港のあるカトマンズまで行くかである。道路が切断され、車が通らないという。私の帰りの便は28日だった。26日も車がなかった。27日の夕方頃、やはり今日もないのかとあきらめかけていたとき、突然、イギリスからの二人の巡礼者がタクシーに乗って山の寺院に現れた。彼らはチャング・リンポチェに面会するためにやってきたという。そして30分もたたないうち、彼らが直ぐにもカトマンズへ帰る、と僧侶の一人が知らせに来てくれた。「私も連れて行って！」と頼み、荷物をまとめて、お世話になったケンポにあいさつし、そのタクシーに飛び乗った。行き先はカトマンズの町、パウダだった。パウダには多くのチベット人たちが住んでおり、パウダナートウの仏塔で有名な、普段ならにぎわいの町である。巡礼者の二人とも、朝から何も食べていないと言った。タクシー運転手はしきりにペットボトルの水を飲んでた。巡礼者が「彼は食べていないんだ」と言った。ペットボトルの水だけが空腹をうるおす唯一の手段というわけだった。カトマンズでは食料品を調達できないという。店の中に食料はあるが、店主たちが建物の中に入るのを恐れて店を閉めているためだという。山を降りる途中にある農家の小さな店が開いていたので、タクシーを止めてもらって米や芋を調達した。パウダに戻ったとき、荷物を預けていた知人宅に届けようと思ったからだ。パウダへ向かう道路は閑散としていた。ナモーブッダからカトマンズまでは車で約2時間の距離である。普段なら渋滞の時もあるくらい混み合った道路だが、その日は走っている車両は我々ののみようだった。途中の10キロに渡るハイウェイはネパール政府とJAICAが共同で建設した高速道路で、以前には建設を記念してそれを記録する横長の看板が虹の橋のように頭上高くに掲げられていたものだが、取り外されていた。一方、中国政府による建設の記念碑をあちらこちらで見かけた。二人の巡礼者たちはよほどお腹が空いていたのか、帰路の途中の道路脇で開いている店を見つけ、タクシーを止めさせ、立ち寄った。暖かいミルクティーとパン菓子、卵を入れたインスタント麺を頼み、ガツガツと腹に詰め込

んでいた。私にもヌードルを頼んでくれ、パン菓子をみやげにもたせてくれた。巡礼者たちは食べ終わった後、ほおっと息を付いていた。生き返った気分のように違いなかった。カトマンズへ近づくとつれ、道路に亀裂が入り、電柱が倒れている箇所が目につくようになった。

バウダに入ると、辺りは暗く、そこは捨て去られたゴーストタウンのようだった。巡礼者にお礼を言い、タクシーを降りて、荷物を預けていた知人のツェリン・ラマ・シェルパさん宅へ向かった。目立った倒壊物はなかったが、人気がないのが恐ろしかった。荷物を預けていた知人へ連絡する術がなかった。バッテリーが切れたのだろう。25日に山上から一度連絡し、無事を確認したのちに電話が通じなくなっていた。知人宅に近づくと、門が閉められている。灯が消えて誰もいないようだった。家の番犬が近づいてくるのがわかった。門の内側から門にすり寄ってクーンクーンと人恋しそうに甘えるように泣いている。普段なら激しく吠え立てる犬なのに、全く違った態度を取っている。夜も更けてきたので、近くにあるチャング・リンポチェのホテルに行って泊まることにした。

そのホテルには逸話がある。ナモーブッダにあるチャング・リンポチェの病院でボランティアをしていたアメリカ人の医師から聞いたところによると、ネパールで武装したマオイストが猛威を振るっていた頃、マオイストの幹部がそこに宿泊していたというホテルだ。マオイスト全盛期にチャング・リンポチェの寺院が社会福祉によって社会へ貢献していることがマオイストに知られていたため、それがマオイストから身を守る術となったと彼女は話していた。他者を助ける社会福祉が今度は身を守る術ともなったということである。その日、そのホテルに入ると、ホテルの庭のあちこちにテントが張られており、たくさんの人が集まっていた。ホテルの客だけでなく、近所の住民たちもいた。緊急時の避難場所として施設を提供していたのだ。炊き出しが行われていた。庭に設営された屋外テントの下で、ガスボンベを用いたコンロの上に大鍋が載せら

れていた。避難して来た近隣住民とホテルに部屋がある客も中庭や外に近いところで、提供された晩ご飯を食べていた。ネパールの家庭では内の中でもガスボンベを用いたコンロで調理するので、それをそのまま外に出して使っているのだ。揺れが続いていたので、建物の中に入るのを憚ってのことだった。入り口の受付付近でシートを敷いて横になっていた人もいた。

宿泊の部屋を取った。受付の係の女性が「サンチュドゥクチャレ（トイレが悪い）」と言う。水栓のトイレに水がなく、汚物が便器に山積みになっていると言う。炊き出しを行っている僧侶の一人が受付のソファに座っていた私にも「カラサ（食事を食べる）」と言って、「テントック」をお椀に入れて持ってきてくれた。小麦粉をこねて団子のようにしたものをだし汁を入れた鍋の中で肉や野菜と一緒に煮て作るチベットの伝統料理の一つだ。食べると菌ごたえとモチモチとした食感がある。わたしはお椀を持って、部屋に入った。部屋でツェリンさんに手紙を書いた。チャング・リンポチェのホテルに泊まっていることを知らせる手紙だ。それをチベットの伝統的な五色の旗にくくりつけ、もう一度ツェリンさん宅に行き、その旗をツェリンさん宅の門に縛りつけた。知人は私が翌日の便で帰ることを知っている。門を開けるためにきつと帰って来るにちがいないと信じた。

ホテルに戻った。揺れが続いていたので、ぐらっと来るたびに部屋を出て中庭に出た。一晩中、部屋に入ったり出たりを繰り返しながら夜が明けた。翌朝ホテルのロビーで振舞われた朝食を摂りながら、カナダからの宿泊客と帰りの便について話した。彼らの便はまだ4、5日先のようなだった。私の便は夕刻飛ぶが、それまでに知人を探して、預けた荷物を受け取らなければならないと話した。朝食の後、再び知人宅に向かった。門に結びつけた旗がなくなっている。知人が一度帰ってきたと思った。門は閉じているが、犬の鳴き声が聞こえない。きつと会えると信じた。まだ付近にいるかもしれないと思い、探しに行くことにした。まず、近くにあるチャング・リンポチェの寄宿学校に行ってみること

にした。国境付近のヒマラヤの近くに住む村々から子供たちが来て、1学年から12学年まで学ぶことができる学校だ。海外からの寄付で学んでいる子どもたちもいる。たくさんの「あしながおじさん」がそこで学ぶ子どもたちの学費を支えているのだ。その校庭にたくさんのテントが立ち並んでいた。大勢の生徒達でごった返している。校庭に建てられた大講堂に亀裂が入っていた。毎年、春にその大講堂でチャング・リンポチェの仏教セミナーが行われている。チャング・リンポチェによる経典の解説で、専ら外国人の信者を対象にしているため、英語の通訳がついている。ある年のセミナーの際、その学校で出会った生徒たちに「どこから来たんですか？」と聞かれたことがある。「日本です」と答えると、女生徒の一人がわたしの学費は日本人が払っていると言う。ある日本人女性が寄宿舎を訪れ、教育を待ち望んでいる待機児童のリストの中から彼女を選んだと話してくれた。そばにいた数人の女子生徒たちが、「髪の毛をセットしてもらった」と話し始めた。日本の美容師の一団が訪れて彼らの髪を施術したということだ。

2012年11月にナモーブダの山頂のチャング・リンポチェの寺院で行われた集会ではその寄宿学校で教鞭をとる女性教師に出会った。彼女もヒマラヤの農村からパウダに来て、その寄宿学校で学び、奨学金で2年間スイスに留学した後、寄宿学校で教師の職についたという。癲癇の発作で苦しんでいたため、最初は海外に行くのが怖かったと言っていた。彼女の農村部では、日々の食べ物にもこと欠いていたという。兄妹数人でわずかな食物を分けあって食べていたという。現金収入がほとんどなく、農村部では当時では物々交換で必要なものを調達していると話していた。2010年ごろのネパールの最下層の最低収入は一月5,000ルピー（約5,000円強）、ネパール全体で平均的月収は2万ルピーと聞いた。当時、耳にした大学講師の時給は500ルピーということだった。2012年に筆者がかかった医者の中診料は500ルピーであった。ある家庭では、そのころ、子供の面倒を見たり、家の掃除をする家政婦に朝から夕刻まで働いて1日100ル

ネパールにおけるフィールドワーク（槇殿）

ピーを支払っていた。また別の家庭では、住み込みのまかないつきの家政婦に一ヶ月2,000ルピーを支払っていた。当時、バウダにある定食屋のモモ（チベットやネパールの餃子）は40ルピーだった。トゥクパ（チベットの野菜や肉と一緒に煮込んだうどんのような食べ物）は50ルピーほどだった。チベット人がバウダナートゥの仏塔を朝・夕に廻るときに利用するようなお茶屋さんのミルクティーが10ルピーであった。今夏の訪問で聞き知ったところによると、最下層の月収は2018年現在では2,000ルピー上がって、7,000ルピー（約7,000円強）になったそうだ。

チャング・リンポチェの寄宿学校を後にした。さらにもっと歩いてツェリンさん一家を探してみることにした。バウダの路上やちょっとした広場のあちこちにテントが張られていた。子供達が元気に遊んでいる姿も見られた。子供はどんな状況でも遊ぶものなんだなと思った。方々を見たが、それらのテントにツェリンさんとその家族の姿はなかった。ホテルに戻ることにした。往路と同様、帰路でもテントの中の住人たちに目を配りながら帰った。と、ホテルの門の前にツェリンさんが私の子供と一緒に腰を下ろしていた。ツェリンさんも私を見つけ、再会を喜びあった。ツェリンさんの手には私が家屋の門にくくりつけたチベットの旗と手紙があった。「飛行機が今日の晩に出る」と言うと、「知っている。だから探しにきた」と言った。どうしてここがわかったのかと言うと、わたしの行動範囲を予測して、きっとチャング・リンポチェのホテルにいるはずだと思ったという。ツェリンさんとその家族は親戚のうちに身を寄せていると言った。そこに一緒に行くことになった。

二階建てのレンガ造りの家が立ち並ぶ通りを進んでいった。堅固に立っていた。古い伝統的なレンガの家々に倒壊した建物などはない様子だった。逆に、新しい近代的なコンクリートの建物に亀裂が入っているのが目についた。次の余震で倒壊するかもしれないと知人は心配していた。途中に広場があったが、広場を囲むレンガの壁が崩れ、4人が下敷きになって死亡したと知人は語った。



写真3 震災で倒壊したバウダナートウの仏塔



写真4 震災で外壁の損傷したバウダナートウの仏塔

4人ともチベット人だったという。壁にもたれてタバコを吸っていたらしい。知人の親戚のうちにはバウダから30分ほど北に歩いたティンチュリというところにあった。親戚宅で、ナモーブダから持ってきた芋や米などの食料品を渡した。10人ほどの家族がそれまでほとんど食べていなかった。女性たちがさっそく調理にとりかかり、芋のカレーとごはんが出来上がった。それをみんなで食べた。食事の後、バウダナートウの仏塔を見に出かけることにした。仏塔までの、舗装のないでこぼこの一本道を仏塔まで進んでいった。途中で開いている店があったので、また米を買った。知人の家族に提供するためだ。仏塔を一まわりした。仏塔に亀裂が入っていた（写真3、4）。仏塔を回るのを「コルラ」という。普段なら早朝と夕刻に特に仏塔をまわる人々でごった返しているが、その日は閑散としていた。

ツェリンさんの親戚宅に戻った。電気が戻っていた。家族がくつろいでテレビを見ている。テーブルに新聞が広げられていた。救援に来る国々の名前が紙面上に大きく記載されていた。小学生の男の子が「どの国が一番ネパールをたすけるか」と言っていた。どの国の援助がいちばん大きいか試算しているよう

だった。まるで国々が救援のためのレースを繰り広げているのを観客席で見ているような雰囲気すらあった。今回の訪問で、その同じ男の子に会った。中学生になっていた。彼の口から中国がたすけてくれるという言葉聞いた。中国の存在がとても大きく身近に実感できるのだろう。

夜晩く、知人の車で空港まで送ってもらった。カタックというチベットの伝統的な白い布をかけてもらい、別れた。空港内は外国人であふれかえっていた。皆、一秒でも早く逃げ出したい思いでいっぱいだったにちがいない。余震が続き、空港が揺れる中、長蛇の列をつくって順番を待つ。皆、疲れ切っていた。係員の対応がわるいと怒りで叫んでいるひとたちもいた。空港で10時間待っていたひともいた。大きな荷物を抱えて空港から出て行く旅行者もいた。飛行機がキャンセルされたからだろう。2015年4月28日の午後11時過ぎに出国予定されていた便は定刻から約2時間ほど遅れて中国の広州へ向かってトリブヴァン国際空港を飛び立った。2015年4月29日の午前1時ごろだった。

それから3年を経て、今夏、ネパールを再訪することとなった。まず、空港内がきれいになっていることに驚いた。ビザ申請がタッチ式のコンピュータ化されていた。写真を持っていく必要がなくなっていた。空港を出るとツェリンさんの家族が出迎えに来てくれていた。車に乗り込み、バウダへ向かった。空港周辺の道路が震災後、拡張されると車中で聞いた。知人は保育園を運営しており、英語保育を行っているのだが、震災前と様子がかわっていた。2015年には自宅の広大な庭は保育園の園庭として使われており、大勢の子供達が園庭で遊んでいたものだが、今では草がぼうぼうと生えて荒れ果てていた。庭の半分はとうもろこし畑になっていた。震災前は多くの生徒をかかえていたが、今は生徒数が減って4人のみと言っていた。ネパールは英語の教育熱が非常に高い。ネパールの富裕層は子供たちを英語媒体の学校へ送る。さらに彼らは欧米の国々へ進学していく。

欧米だけではない。昨今急増しているのが日本を目指すネパールの若者たち

だ。2015年の震災の年に訪れたネパールの日本領事館で、日本への渡航者が8倍に伸びていると聞いた。毎日、早朝から領事館のまわりに長蛇の列ができ、毎朝50人に整理券を配ってビザを出しているという話だった。定食屋のレジでバイトをしている大学生から、彼の友人は日本で月々「スリー・ラック」（日本円で30万ほど）稼いでいるという話を聞いた。留学生に許される、週あたり28時間の労働時間内で得られる収入では到底ありえない額である。今回の調査の間に、ネパール政府が大阪と東京への直行便を就航させる計画をしているという話を聞いた。今、現時点（平成3年11月21日）でネパールー日本間に直行便はない。⁽¹⁾ネパールー日本への直行便就航計画が出るほど、日本への渡航者が増大しているのだ。ちなみに、私が日本から利用するのは専ら中国機である。博士課程の際にドイツに在住していたときはカタールなど、アラビア半島を経由する便でネパールへ調査旅行に行っていた。そこからはネパールから出稼ぎにきた労働者たちと乗り合わせるのが常だった。

ケンポ・カルマ・ゲンドウンとの再会

今回の調査の目的の一つは、ケンポ・カルマ・ゲンドウンと再会し、再び、ケンポのもとで研究を続けることであった。先述したように、ドイツでの博士課程のときから教えを受けている私の師匠である。2009年に師事し始めた当初はロボンでいらっした。ロボンは7年にわたる仏教大学での学問を修めた学僧に与えられる学位の称号である。そののち、さらに研鑽を積み、ケンポとなる。ケンポとなれるのは極めて少数である。チャング・リンポチュエの寺院における仏教大学で教鞭を取り、後輩の指導に当たっておられる。ヒマラヤの麓にあるドルポ出身者で、シュントン（他空）の教義の専門家であり、筆者が博士論文で扱ったテキストの幾つかはケンポと勉強したものである。筆者が望月海慧教授の編集する「*Acta Tibetica Buddhica* 4」に出版した六字真言「オーン・マ・ニ・ペ・メ・フーン」に関するテキストも、ケンポの下で勉強した成果で

ある（Makidono, 2011）。

チベット寺院では、夏季には45日間にわたる夏安居が行われる。バウダにあるチャング・リンポチェの寺院は改修工事中であったため、僧侶たちはナモー・ブツダのヤンツェ寺院に移っていた。ケンポもヤンツェ寺院におられたのだが、ハンガリーにいる信者たちからハンガリーに招待されており、そのビザ手続きのためにバウダに滞在しておられた。しかし、夏季はまた、ネパールは雨季である。ケンポはビザの手続きのあと、即刻、ナモーブツダにお戻りになる予定であったが、道路事情が非常に悪く、戻ることができなくなってしまっていた。そこで、道路の様子を見つつ、しばらく、バウダにあるケンポのお父様がお持ちの自宅で勉強することとなった。結局、ケンポはビザが間に合わず、ハンガリー行きは実現しなかったのだが、その分、私との勉強時間を延長していただけることになった。

チャング・ヤンツェ寺院へ行く機会をうかがいつつ、バウダに滞在中、サンガク・テンジン・リンポチェの奥様であるラモーさんに連絡を取った。サンガク・テンジン・リンポチェはニンマ派の活仏である。4人息子と一人娘を持ち、家族5人でバウダに住んでいらっしゃる。そのご長男もすでにある高僧の輪廻転生者として認められているようだ。3年ぶりのネパール訪問ではあったが、奥様から即座に返信があった。バウダ近郊のティンチュリという場所にあるニンマ派のヨルモ寺院で、リンポチェが指揮をとる、パドマサンバヴァを祭る儀式が3日に渡って行われ、リンポチェがそこで教えを伝えると知らされた。8月4日から6日にかけて、その典礼に参加した。儀式は朝8時から夕方5時ごろまで行われた。チベット仏教は篤い帰依信仰に支えられている。寺院には高齢のチベット人たちがたくさん集っていた。観音菩薩の六字真言「オン・マ・ニ・ペ・メ・フーン」を刻んだマニ・コルをくるくる回す姿がそこでも見られた。朝には朝食、昼には昼食、3時ごろにはおやつが、三日間、毎日参加者全員にふるまわれた。3日間、リンポチェが儀礼を執り行い、最後の3日目に、

マイクを用いて、教えを説かれた。リンポチュはチベット語で説かれ、僧侶がネパール語に翻訳して、会衆に伝えた。リンポチュはニンマ派のゾクチェンの教えにも触れられた。教えの中で、「あなたは一人ではない。」とリンポチュはおっしゃった。「というのは、たくさんの菩薩やブツダと一緒にいるからだ」と。瞑想の中に現れる諸仏たちや師に囲まれているとき、決して一人ではないことを実感するだろうという教えに心打たれた。

チベット仏教には「埋蔵経」（テルマ）と言われる經典群がある。「埋蔵経」とは一旦、隠されて、その後発見された經典という意味である。専ら、ニンマ派から作り出されている經典であり、偽経とみなされるのが常である。「埋蔵経」の種類は様々だが、瞑想時に諸仏から教えを受けた者が作り出したテキストも「埋蔵経」のうちに数えられる。今年度以来、身延山大学国際日蓮学研究所を拠点として、向こう3年間に渡る科学研究費助成事業に採択された筆者の研究（課題番号18K00066「チベットの埋蔵經典に描かれた建国神話伝説における仏教思想の研究」）は「埋蔵経」を取り上げている。特に、『マニ・カンブン』という「埋蔵経」に焦点を当てている。この經典は主尊を観音菩薩として、観音菩薩の六字真言を説く。この經典の特異点の一つは、一般的に「埋蔵経」が偽経として批判的にされてきたのに対して、汎チベットの的に受容されてきたということである。そのテキストもチベット仏教の諸派から出版され、ダライ・ラマ政権からの支持を受けてきたという異例の經典なのである。

チャング・ヤンツェ寺院への出立

チベット仏教は欧米からの信者はもとより、香港やマレーシアなどからの中国系の信者たちによって支えられている。チャング・リンポチュはネパール国内に数カ所の寺院を持っておられる他に、カナダや香港にも寺院を持っておられる。2008年にネパールのナモーブツダの地に開山されたのがチャング・ヤンツェ寺院である。パウダで雨が収まるのを待つこと一週間、ケンポのスマート

ネパールにおけるフィールドワーク（槇殿）

フォンに刻々とチャング・ヤンツェ寺院から周辺付近の道路事情が伝えられてきた。山では土砂崩れが起こっており、道路が塞がれているため、行くことができなくなっていた。寺院の僧侶たちが山から崩れてきた土砂を片付ける様子も写真で見せてもらった。見ると危険なことが直感できた。足がすくむ思いだった。でも、行かなければならない。そのために来たのだから。山に行って、勉強するのだ、と我が身を奮いたたせた。「明日行く」とケンポから電話があり、午前5時にチャング・リンポチェのバウダにあるホテル前で待ち合わせることとなった。

8月7日早朝、ケンポとケンポの友人のタマン人のアートマンさんの運転するジープでチャング・ヤンツェ寺院に出立した。カトマンドゥを眼下に眺望しながらジープが標高を上げていった。でこぼこ道に車が上下するので、気持ちが悪くなるのを漸くおさえて、約2時間後に寺院に到着した。寺院前で起きた土砂崩れの土砂は片付けられて道路脇に盛られており、削りおちた斜面と共に土砂崩れの生々しい跡を残していた。ジープを降りると、ひんやりした。3年振りのヤンツェ寺院だ。ケンポが「覚えている？」と聞いてきた。「もちろん」と答えた。喧騒のバウダを離れて、静けさに包まれた。やっと帰ってきたことを実感した。3年前にはなかったが、寺院の玄関口に、経典を刻んだ巨大な石壁が現れて驚いた。中国系の信者による寄進によって建造された『金光明経』の「捨身品」を刻んだ石壁だった。チベット語と英語と中国語の三ヶ国語で刻まれていた。先述したように、聖地ナモーブッダは、かつてブッダがその身を捨てて、飢えた虎に自分の身を与えたということに因る。新たな宿舎も建てられていた。以前あった粗末な汚い5部屋からなる小屋は跡形もなかった。ハンブルク大に在籍し、ネパールでのフィールドワークをしていたときは、その、ベッド一つと机だけを備えた3畳ほどの部屋に1晩400ルピーで泊まり、勉強した。トイレと風呂は野外にあるものを使った。水洗ではなく、手で水をくんで流した。夜中にトイレに行くのが恐ろしかった。その小屋がなくなって、代わ

りに真新しいきれいな4階建てのビルが建っていた。値段も1部屋1晩3,000ルピーと聞いて、またびっくりした。かつてはインターネットもなく、ひとたび山に入れば、下界と通信不能になるのが常だった。が、今やネットはそこにも普及していた。便利になったものだ。とはいえ、かつて泊まっていた、あの恐ろしい小屋が懐かしく思えた。

チャング・ヤンツェ寺院ではチベット語の夏季講習が開かれていた。教授する指導者は聖下カルマパ17世の翻訳者として知られている、アメリカ人のケンポ・カルマ・デイヴィッド・チョッペル先生だと知った。受講者は欧米、マレーシア、中国からだと言った。中国からは3人が受講していた。そのうちの一人から声をかけられた。どこから来たのか尋ねられたので「日本から」というと、「珍しい」と言われた。珍しがられるのはこれが最初ではなかった。チベットの仏教寺院へ行くと大抵日本人は珍しがられる。彼らの経験ではチベット仏教寺院で日本人を見ることはめったにないようだ。

寺院では3食付きだが、朝は本堂で、僧侶たちの朝の勤行に参列しつつ、勤行後にその場でいただいた。昼食と夕食は食堂で僧侶たちとともにいただいたが、夕食を提供されるのは年の幼い子供の僧侶たちと訪問者だけであった。残りの僧侶たちは夕食を取らず、夕食の時間には本堂で勤行し、お茶を提供されるのみであった。ある晩、ケンポが今日はディベートがあるから来てごらんと言われ、午後8時から午後10時まで本堂で行われたディベートの視察に行った。わたしの師匠のケンポと他2人のケンポが見守る中、次々とディベートが行われていった。トピックの一つはインド仏教における四大学派の「カンサクギタクメ（人我の無）」の見解についてであった。直接ディベートに関わり、指示を出したり、援助をするのはシェジャでの全課程を終了したロボンたちだった。3人のケンポは時間を計って、「そこまで」と切ることはあっても、議論については何も言わず、ただ頷いたり、微笑んだりするのみだ。ロボンたちの中から次期のケンポが生まれていくわけなので、ロボンたちがどのようにディベート

に指示を与えるかもケンポたちは見ているのだろう。

帰国の前日、早朝にヤンツェ寺院の下方にある、ナモーブツダの村を訪れた。その日はネワール仏教徒たちの祝祭日で、大勢の信者たちが村のストゥーパに捧げ物を持って参拝していた。それから、宿舎へ戻り、バウダへ帰る準備をしていると、早朝にケンポから電話があった。デインゴ・ケンツェ・リンポチェ（1910-1911）の没された後、シェチェン寺院を率いて来られた、シェチェン・ラブジャン・リンポチェ（1966-）がナモーブツダに面する一つ山向こうに所在する、ニンマ派のシェチェン寺院のリトリート・センターを訪問されているので、一緒に行かないかと誘われた。もちろん、行くことにした。20分ほどケンポと山道を歩いた。着くと、ヤンツェ寺院が谷を隔てて向こうの丘に見える。そこでは昨晚、地震があったという。地面を見ると、ひび割れている。山の地盤が異なるのだろうか、ナモーブツダは平穏であった。

ラブジャン・リンポチェが訪問された理由は、その日、「3年3ヶ月3日にわたるリトリート」の最終日で、その実践を行っていた修行者が修行を終え、リトリートから出てくるからだと伝えられた。そのリトリートで成仏する者もいると言われるほどの厳しい修行である。ケンポとわたしはリンポチェに五体投地で拝礼し、席を進められ、昼食を振舞われた。ラブジャン・リンポチェの側近たちとともに、会食させていただいた。側近はシェチェン寺院のケンポたちで、その中のお一人がわたしの博士課程の指導教官（ドルジ・ワンチュク教授）の友人であった。こんなネパールの山の頂上で指導教官の友人に会うとは、何と世界は狭いことだろうと感慨深く思った。

ラブジャン・リンポチェは東京を訪問されたときのお話をわたしにしてくださいました。ある大学の教職につかれている方からお招きを受け、訪れたところ、その方に達者なチベット語で出迎えられ、仰天したと茶目っ気たっぷりにお話しになった。また、日本のあいさつの習慣にとっても感銘を受けられたこと、さらに、禅にご興味があり「禅は修行だけでなく、書かれたものもあるのか」と

ネパールにおけるフィールドワーク（槇殿）

ご質問なされたので、「はい」とお答えすると、「例えば」とさらにご質問なされたので、思わず「道元」とお答えした。筆者的になぜそこで道元禅師（1200-1253）が口について出たかという、以前、サキヤ派のゾンサル・ケンツェ・リンポチェ（1961-）がティンチュリにある、サキヤ派寺院に敷設する国際ナショナル・ブディスト・アカデミーで講話をなさったとき、「座ることの意味がわかっている」人として「道元」のお話をなさったことが咄嗟に脳裏に浮かんだからだった。

リトリートを終えた修行者たちが現れた。皆ブータン人で、ブータンの衣装を身につけている。リンポチェに金封を捧げ、リンポチェから一人一人カタクを授けられた。リトリートの場所を見ることにした。太陽の光のさんさんと当たる、美しいレンガ造りの建物が立ち並んでいた（写真5）。



写真5 シェチエン寺院の山上のリトリートセンター

おわりに

今夏の訪問で、修復されたバウダナートゥを見ることができたのは喜びであった（写真6）。ネパールでの現地調査を始めたのは2008年の夏からだ。カトマンドウ大学に敷設し、バウダにある、ニンマ・カギユ派の運営



写真6 修復されたバウダナートゥの仏塔（2018年）

ネパールにおけるフィールドワーク（槇殿）

するランジュン・イェシエ・インスティテュートで2学期間学んだ。さらに、ティンチュリにあるサキヤ派の寺院の運営するインターナショナル・ブディスト・アカデミーで2008年から2012年にかけて夏期休暇中に1月ほど行われていたセミナーに5夏聴講した。最初にネパールを旅したのは1995年春、まだ当時、王政が敷かれていた頃である。一週間滞在し、大学の春休み期間中にカトマンズからルンビニーへバスで行き、そこからまた電車やバスでインドのサールナート、ブッダガヤーを見る聖地巡礼の旅に出かけた。それから、幾度となくネパールを訪れてきた。地震で足が止まりそうになっていたが、今夏、ネパールを再訪できたことで再び、フィールドワークの必要性を実感している。実際に自分の足を使って現場に行かずには成し得ないことがあるからだ。わたしの知識は体験から得る経験知によるところが大きい。

ネパールにおけるボランティア活動について付記しておきたい。地震から帰国後、トゥンダム・リンポチェ（生年不明）からメールを拝受した。2005年から2008年までのアメリカ滞在中にお世話になった師である。カギユ派のトゥンダム・リンポチェご自身は2004年にハーヴァード大学から博士号を取得しておられ、現在はアメリカで活動しておられる。⁽²⁾ 筆者の博士論文で取り扱った文献に説かれたシェントン（他空）の教えを最初に読み解いて懇切丁寧に教授してくださった恩師である。ネパール大地震の災害援助のための支援を募るために、支援を募る記事に日本語訳をつけて欲しいという依頼を授かり、取りかかった。トゥンダム・リンポチェの派は「別のカルマパ」の系統にある。いわゆる「二人のカルマパ」問題の他の一人でいらっしゃる、タイエ・ドルジェ（1983-）猊下の系統である。2011年3月にはチャング・タシ・カンツェ寺院で、大阪からの医療チームに出会った。眼科の医師団で、ネパールで医療奉仕をされていた。

今回の夏の訪問の他の収穫の一つは、バウダにあるシェルカル・メディカル・センターという医療機関で、『マニ・カンブン』の類似の転籍である埋蔵經典

『カチェン・カ・コルマ』の写本（Sron btsan sgam po. *bKa' hcems ka khol ma*. Tibetan Buddhist Resource Center からダウンロード. Work : W00KG010083⁽³⁾）をウチェンに書き直す作業を行った。校正の作業を経て、今後の『マニ・カンブン』研究のための基礎資料として発表する所存である。

参考文献

- 朝日新聞デジタル : <https://www.asahi.com/articles/ASM1B1R1NM1BUHBI003.html>
2019年1月10日 検索
- Makidono Tomoko. "Nāgārjuna's six-syllabled mantra *om maṇi padme hūm* in the *bsTan'gyur*: A Text and a Translation of the *Āryalokeśvaraśaḍakṣarasādhana*." *Acta Tibetica et Buddhica* 4, 2011: 1-22.
- Buddhist Digital Resource Center (<https://www.tbrc.org/#lfooter/about/newhome>).

注

- (1) カトマンズと関空を結ぶ直行便の就航が両国間の外相会談で決定された（朝日新聞デジタル : <https://www.asahi.com/articles/ASM1B1R1NM1BUHBI003.html> 2019年1月10日 検索）。
- (2) <http://www.dharmakaya.org/about-us/our-teachers> 2019年2月26日 検索
- (3) Buddhist Digital Resource Center
(<https://www.tbrc.org/#lrid=W00KG010083> 2019年1月26日 検索).

科学研究費助成事業 課題番号18K00066